

Title	哲学する“態度”
Author(s)	高橋, 綾
Citation	臨床哲学のメチエ. 2007, 16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11309
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

哲学する“態度”

高橋 綾



今回の洛星高校の講座「哲学」は、前期は「哲学的に考える 入門編」として、クリティカルシンキングの教材やソクラテスの対話ゲームを用いて、哲学的思考、対話の“基礎”となる立論や意見の吟味の練習を行い、後期は、前期で得られたことを元に実際に自分たちで議論をしてみるという授業の構成になっている。授業をこうした構成にしたのは、第一に「自分たちで議論を作っていく」ことを主目的にしつつ、そこからさらに進んで、「自分たちが行っている議論を自分たちで評価できるようになる」ということまでを目標にしたからである。今回の授業では単に議論するだけではなく、“良い”議論とはどのようなもの

か、哲学的議論とはいったいどのようなものであり、それを実現するためにはどんなことに気をつけなければならないのかといった点から自分たちの議論をメタに評価できる視点を持ってほしいと考えた。よって、議論することと平行して、思考や対話に対する反省ということを常に促すよう心がけた。こうした目標や授業構成案を発案した責任者として、この二つの目標が達せられたかどうかを前後期の授業を全体として振り返って反省としたい。

いつものように学生の洞察力に助けられてある程度この目標は達せられたが、哲学的対話や思考の“基礎”を前期で、その“応用”としての実

際のディスカッションを後期でという構成それ自体は考え直す余地があると思った。後で述べるように、授業の構成において、このような基礎/応用という手順を無意識のうちに立ててしまったことにより、学生達には、“良き”議論をするための鍵が、実際の議論で自分たちがどう振る舞うか以外のところ(対話やテーマに関する知識や対話の技術)にあるような印象を与えてしまったのではないかという気がしている。

■ 前期 ■

前期は一回目ウォーミングアップの他己紹介に続き、二回目に論理的思考・批判的思考の教材【資料1】を使って一問一答式で立論や判断を吟味する練習を行った。三回目は対話のなかで思考の吟

味を行う練習として、前年度に引き続き「ソクラテスの対話ゲーム」を行い、四回目はそれを振り返って、対話について考えた。前期の最後の五回目の授業では短い対話編(『「人生は無意味だ」って、どういう意味なのだろう』、野矢茂樹作)を使って議論をし、そのあと哲学的議論には何が必要かを前期全体を振り返りつつ話し合った。(※ソクラテスの対話ゲームについては詳しくは前年度のメチエを参考にされたい)

二回目まではうまく進んだが、三回目のソクラテスの対話ゲームの時にややひっかかるものを感じた。(前年度にもソクラテスの対話ゲームは難しいという声があがったが)今年度はうまくいかない(あるいはなぜうまくいかないのかの気づきにいたらないで漫然と話している)グループが

あなたの哲学的思考力を試す練習問題

(1) 言葉の意味ははっきりしているか

A、B、Cの3人の議論は「自由」の定義がそれぞれ違うためかみあっていない。A、B、Cがそれぞれどういう意味で「自由」という言葉を使っているか定義してみよう。

A：ホリエモンって自由でいいなあ。もう会社で仕事しなくてもいいし、好きなだけ家でさらさらしてられるんだもんなあ。

B：今のホリエモンは自由じゃないよ。だって信用をなくしてしたい仕事もできないし、自分でお金も稼げないから、なんにもしたいことできないもん。

C：前からホリエモンの生き方ってあまり自由とは思えなかったなあ。だってお金の縛られてるんだもん。

(2) 立論の筋道に飛躍や隠れた前提はないか

次の立論において、飛躍しているところや隠れた前提を指摘してみよう。

知的活動は規則には表せない。コンピューターは規則に表せることしかできない。だから人間はコンピューターよりも優れている。

東京大学の学生(大学院生)を除く)の女子の割合は15,747名中2,790名、17.7%(2000年)だから男のほうが頭がいいのだ。

【資料1】：前期第二回目「立論を吟味する」で用いた教材。(2)は『論理トレーニング101』、野矢茂樹、産業図書、2001年から引用、出題した。

去年よりも若干多いように感じられた。また「早く議論がしたい」という声も聞かれた。今考えてみると前年度は、何回も議論をして、その後でこの対話ゲームをしたために、それをきっかけにして、いままでの自分たちの議論に何が足らなかったかを振りかえる

ことができたという面があったが、今回は実際の議論を

してみる前の助走段階が長すぎたのだと思う。学生には、前期の授業の構成を野球に例えて、「まずはキャッチボールや打撃練習、関係プレイの練習などをしてから、実際の試合(議論)をしてみよう!」と説明していたが、彼らにしてみれば「そんな基礎練習はいいから、早くグラウンドに出せよ!」という気持ちだったのだろう。

それに比べると先シーズンは、いろいろ試合したけど今ひとつ頭打ちだ、なにかが足りないと感じていた時にソクラテスの対話ゲームをやってみることによって、無駄に投げたり打ったりするのではなく、一つ一つのプレイの意味に選手があらためて気づくことができた、というような感じ



前期第四回：学生たちが行ったソクラテスと若者の対話を皆と一緒に検討する本間さん

だった。

確かに哲学的思考や対話においては、意味を定義することや立論の飛躍をなくし、論拠を吟味することが重要だと考えられるけれども、そうした批判的・論理的思考の“基礎”練習を積み上げていって初めて議論という“実践”が可能になるのではなく、むしろ逆に、“基礎”と考えられているものは、“実践”の積み重ねのなかから抽出されたものであり、“基礎”練習は“実践”と平行して行うからこそ意味があるのだということに改めて気づかされた。

最後の五回目にはテキストを元に全員で議論をし、それを振り返って前期のまとめをすることができた。議論の最後のまとめで「哲学的議論に何が必要?」という問いに対して学生達が出してくれた意見は次のようなものだった。

- (1) 結論を出す
- (2) 意味を定義する
- (3) 比喩や例をつかう(理屈だけではなく具体的な例

を出して考えることの重要性)

- (4) 議論の道筋を協力して作る
- (5) 最初の問いに戻る

これらの意見はそれなりに的を得たものであると思ったが、後期に実際に議論をすることになった時に、これらの気づきがあまり活かされていないと感じた。

■ 後期 ■

後期は前期をふまえて自分たちで議論をするということで、今回は議論のテーマや問いも学生に考えてもらうことにした。前期最初の回では3グループに分かれて、テーマから問いを立ててもらった。しかし、出てきた問いをみると、「これで哲学的議論ができるのか!？」という問いが多かった。野球の比喻を引っ張ってここでも使うなら、いきなり府下一番の実業団チームと試合がしたいと言われた草野球チームのへっぽこコーチのような心境である。考えてみれば、生産的に議論し思考するために適切な問いを立てるということは、かなり議論や思考の実践に通じていないとできないわけだから、この結果は当然だったのである。そばについている講師が議論しやすい問いを作るように積極的に介入すべきだったのである。

特に“人類にとって戦争は必要か”という問いと“救いを求める宗教は必要か”という問いについては、「なるほど、男子高校生とはこんなことを考えて生きている人たちなのか。」と新鮮だったが、それをどう展開して哲学的な対話にしていくのか、と考えるとすこし困ってしまった。

◇ “人類に戦争は必要か”

私が一番苦手なお題だと思った「戦争」は紀平さんに引き受けていただき、「延命」は榎本さんをお願いし、自分は「救い」の回の進行をするこ

とにした。

「戦争」の回には、彼らがどんな議論をするのか様子見で参加したが、途中から議論に全くついていけなくなった。(戦争の進行の意図に関しては、進行役である紀平さんの感想を参照のこと。)この回の議論は(進行役の介入が少なく、彼らが思う存分自己流のプレイをしていただだけに)いろいろと印象に残ることがあったので、それを記し、考えたことを書いておきたい。

私がついていけなかった一番大きな点は、誰にとっての、どんな戦争を議論のなかで問題にしようとしているのかがまったく明らかでなかったことである。(これは後で学生に自分の感想としても話したことであるが)太平洋戦争、アメリカのイラク攻撃、アジアの情勢などいろいろな具体例が出、中にはクラウゼビッツの『戦争論』を引用してくれた学生もいたが、どの発言も、そうした戦争がほかならぬ発言者であるその人にとってどんな意味を持っているのかということが私には全くといっていいほど見えなかった。そうした語りや議論は戦争についての“朝まで生テレビ”的な一般論としては成り立ちうるし、そうした議論のなかでよく耳にする意見もあったが、それがはたして哲学的な議論なのかといわれると疑わしく思われた。

その中でも特に自分は絶対そういう発言はできそうにないと思い、驚いたのは、戦争の主体(国家やその指導者)を自明なものとし、さらにそれら自分をアイデンティファイして語る発言者が

思いのほか多かったという点である。(ここにも右傾化の波が?!と一瞬思ったが、三国志やガンダムが好きで一彼らはどのジャンルにおいても案外古典を大事にしている一歴史、ゲーム、アニメヒーローに自己同一化しがちだという高2男子的感性に由来するところも多くあるようだった。あるいは“右”的感受性はこうした男子的土壌を一部源泉に培われていくものなのかもしれないが。また、授業の後、学生同士が「おまえ、案外“右”なんだな」とか「お前は“右”かと思ったけど結構“左”だったな」とささやきあっているのを耳にし、これまた興味深く思った。語調からして、それらの感想はお互いの政治的立場を真剣に問題にしているというよりもむしろ、“右”“左”を“キャラ”として演じている印象を受けた。)

それはさておき、この回の議論から翻って考えてみて、自分がなぜ「戦争」についての哲学的に議論するということを「苦手」だと感じたのかがよくわかった。

要するに、私のような者は、戦争や、戦争の主体とされる国家と自分がどのような関係にあるのかがまずよくわからないので、そこから先に進めないのである。だから、戦争の主体や国家にアイデンティファイして戦争を肯定することも、それらを徹底して否定し、それに反発することも、どちらの立場にも身を置くことができず、「どういう立場で、どういう言葉で語り出すことができるのか」と戸惑い、煮え切らない“ノンポリ”的

態度をとることになる。

同じような戸惑いを国家や政治、社会制度をテーマにした哲学カフェでも感じたことがある。「自由」や「親切」といったテーマの時には、「どうやったら自由になれるか」「親切にするのはいいことか」ということだけでなく、「そもそも自由ってどういうこと?」「親切にするってどういうこと?」という根本の前提を問う問いが発しうるのに、戦争や死刑など国家や政治に関連する話題になると「そもそも我々にとって国家とはどういうものであるのか」という問いをすっとぼしていきなり“右”と“左”との論争になることが多い。死刑をめぐる哲学カフェで進行役をしたカフェフィロメンバーの武田さんと話した時、彼はこのことを「国や政治のことを語るときには、みんな“スイッチ”が入る」と表現していた。むしろこちらとしては、なぜそのスイッチが入ってしまうのかを問題にしたいのに、一度“政治的”論争が始まると、「国家とは何か」というようなそもそもの前提はほとんど顧みられない。

哲学的な議論が“政治論争”に変わってしまうのを見るたび、それに参加できない自分に引け目を感じつつ、「政治的《主体》にはなってもいいけど、政治のおしゃべりの《語り手》にはなりたくない」と言っていたロラン・バルトのつぶやきを思い出したりしていたのだが、この回の議論を通じて、そうした“政治論争”はまったく哲学的ではなく、「私(たち)にとって“国家”とはなにか」「私は戦争についてどんな立場から何を語りうるのか」というそもそもの前提をきちんと問う

ことこそが必要なのだということがはっきり分かった。

(この授業の後、永井均さんの『子どものための哲学対話』を読んでいたら、「右翼と左翼ってなに？」という問いについて、主人公のぼくと対話相手の猫ペネトレが対話をする場面がほとんど唐突に出てきた。「右翼と左翼とどっちが正しいの？」という問いに対してペネトレは「どっちも同じようなもの」と言い、「対立ってというのはほとんど前提を共有しているものの中でしかおこらないんだよ」と答える。右翼と左翼の対立も「政治ってものが、心をわきたたせるようななにかだと感じるなかまたちの間でだけ、意味を持つような対立だからね」とペネトレは言い切っていた。この会話を理解できる子どもがどれくらいいるのかよくわからないが、洛星高校の人達にはぴったりではないか思った。)

◇“救い”について

以下では、私が進行をした“救い”を巡る議論を報告しておく。学生の話し合いで最初に出された問いは「救いを求める宗教は必要か？」であったが、戦争の回の反省としてこの問いのままでは大雑把な一般論に終始してしまいそうだったので、救いをテーマにした短いコント【資料2】をテキストとして用意し、それをもとにして救いについて考えていくことにした。

切迫した状況のなかで、奇妙で自分勝手な振舞いばかりする男Bがいったい誰なのかというこ



とや、男Bの考える救いと男Aの考える救いの違いは何なのかということ巡って、徐々に意見が出た。最初に口火を切った人たちの意見では、男Bは悪魔であるとか、ただの馬鹿というものが多かった。男Aと男Bの考える救いの違いは何かを議論するうちに、男Aの考える救いは「俗世的なもの」だが、男Bの救いはそれとは別なもの、あるいは「宗教的なもの」と言えるのではないかという意見が出されたあたりから、Bの言う救いを言葉で分節化するとどうなるのか、そしてBはいったい誰なのかについてゆるやかに関心が向かい、そこからぼつぼつと深められた意見が出た。

- ・男Aは救われていないが、男Bは救われている。なぜなら、救いとは自分が満足する状態に至ることであり、男Aは満足をいまだ知らないが、男Bはすでに自分に満足している
- ・男Bはソクラテスのようだ、男Aを問い質すことによって、男Aに救いとはなにかを気づかせようとしている。(このコントはキルケゴールの

コントのあらすじ（いとうせいこう、『幻覚カプセル 絶望居士のためのコント』、スイッチ書籍出版部、1992年より）

男Aと男Bが吹雪のなか遭難し、山小屋に閉じ込められている。男Bは男Aがとっておいた食料や燃料を勝手に使い、男Aが合わせておいたラジオの臨時ニュースを勝手にポップスチャートに変えてしまう。さらに男Bの行動はエスカレートし、おならをしたと言って窓を開け放してせっかく暖まった部屋を冷やし、ようやく到着した救助隊に「大丈夫ですよ」と言って、ご丁寧にタバコまで進呈して帰らせてしまう。男Aは男Bの行動に絶望し、座り込み、泣き出してしまう。

（以下、実際のコントの最後の部分の抜粋：一部本文を変更し簡略化している）

- 男B 絶望したがり屋だねえ、あんたは……………。
- 男A どうすりゃ絶望しないでいられるんだよ、こんな状況で！？
- 男B （微笑んで）例えば、お腹がすいたら僕を食べればいいじゃないか。乾かして燃やしてもいいよ。
- 男A 俺が絶望したがり屋なら、お前は悪魔だ。
- 男B 何故？
- 男A 俺を苦しめた上に、罪を犯させる気かよ。
- 男B 僕は食べられてもいいんだよ。
- 男A お前はよくても、生き残った俺に罪が残るだろう！？
- 男B （少し声をあげて）そうだとすると、その時あんたに救いはあるよ、きっと。
- 男A どうな？
- 男B 知らない。具体的に言えるようなら、それは望みでしょう？救いじゃないよ。
- 男B、椅子の方に行き、向こうむきに座る。
- 男A （ため息をつき）お前は神か、悪魔か、そうでなきゃ馬鹿だ。
- 男A、男Bの後ろ姿をじっと見ているうちに憎くなったのか、荷物を持ちあげ、男Bの後頭部を殴ろうとする。が、できない。
- 男B 人を殺しても救いはあるのに……………信じないんだねえ……………。
- 二人、そのまま長い沈黙。次第にラジオの音が大きくなり、やがて美しいメロディーが大音量で流れ出す。
- 男A 驚いて部屋を見回し、最後に後ろを向いたままの男Bを見つめる。
- 男A （緊迫した調子で）神……………なのか？
- 男B 神様がいることが救いなのか？……………（音楽のなかで責めるように）
- 男A しばらく立ちすくんでいる。そのうちに音楽の間から臨時ニュースが聞こえてくる。臨時ニュースはこの隕石墜落による災害が、未曾有の被害をもたらしたと、大火災が起こり、それが拡大していることを告げている。男Aは音楽とニュースの流れる中、男Bの背中を見つめつづける。
- 男A ……悪魔か？
- 男B （あきれたように笑って）悪魔がいると救われるの？
- 男A 混乱して周囲を見回す。音はさらに大きくなっていく。
- 男A （男Aの背中に）じゃあ、馬鹿なのか？
- 男B （嘲るように言い捨てる）僕が馬鹿なのが救いなのか？
- 男A 何も言えず沈黙する。
- 男B 黙ってれば救われるの？（振り返ると、たっぶり間をおいてから）ねえ？…

「絶望に至る病」をモチーフとしたものであったので、キルケゴールが参照していたソクラテスの名が出てきたときにはかなり驚いた)

・救いがあるから信じる、のではなく、信じるからこそ救いがある

というよう鋭い意見が出されたが、時間がなくなってしまう、これらの発言を踏まえて“救い”とは何かをもう一度考え皆で定義するまでには至らなかった。

ところでこの回では、このように救いとは何かについて考えを深めていく何人かがいる一方、最初から救いというテーマで議論すること自体に否定的な人がいたり、「何を救いとするかは人それぞれであり、そんなことについて話してもしかたがない」という相対主義的な意見が途中で噴出したりして、こうした人たちに應對しつつ、議論を組み立てていくのが大変だった。そうした人にとっては、救いや信仰の本質について議論し考察することと、実際にある宗教を信じることを区別するのが難しかったようで、この混同に基づくものと思われる、救いや信仰についての議論に対する頭からの拒絶反応が幾度となく浮上した。進行役である私は、この二点を区別するようにうまく促せなかったし、またなにかを言っているようで、自分の意見を全く述べていない相対主義的な言説にひっかかりつつも、それにうまく反応し、議論の中に巻き込むことができなかった。またこういったテキストを用いる際には、単にテキストの読解や解釈で終わるのではなく、そこから少し

距離を置いてテーマについて自分たちで考える方向に持っていくのが難しいところであり、また一番のポイントでもあると思った。

しかし先に述べたように、一方で救いの本質について考察を進めてくれた人たちがおり、また、救いについて語るなんて無意味だ、と主張していた人の一人は、五回目の振り返りで「救いの回は、自分は関心が持てなかったが、議論としては深まっていたと思う」という意見を述べた。

こうした人は、議論に参加し巻き込まれることには距離をおきつつ、議論をメタに評価する視点を持って観察していたのだろう。しかし、後に述べるように“良き”議論をすることは知識があり、議論の分析ができるという問題ではなく、実際の議論のなかでの“態度”の問題だと私は考えるので、できればこのようなタイプの人でも議論の内部での発言をして欲しかったし、議論のメタレベルに立って分析するという振る舞いが議論の内部から見た場合にどう見えるのかということに気づいてほしかった。こうしたことを考えると、ソクラティックダイアログで用いられる、議論の参加者全員が自分達の議論を振り返って分析するメタダイアログの意味がよく分かった。議論自体をしている人と議論をメタに分析している人が混在するのは、混乱や無用の反発を産むので避けるべきなのだろう。)

◇ 振り返りについて

「延命に価値はあるか」「人類に戦争は必要か」「救いについて」の三つの問いについて議論した後、最後に自分たちの行った議論について振り返って話し合う回を設けた。

後期の議論については、自分達の中でも不満やストレスがあったようで、いくつかの反省点が出された。「定義や論拠付けがなく、好き嫌いだけの水掛け論になっていた」「お互いの話をよく聞いていなかったのではないか」というような点が主にあがっていたと思う。

最後のほうでは、授業の運営構成や進行に対する不満もいくつか出された。特に記憶に残っているのは、「哲学的議論とは何かがいまだによく分からない。これこそ理想だ、という議論をビデオでも何でもいいから手本として見せてほしい。」という意見と、「クオリティの高い議論をするには、準備や予習が必要なのではないか。そのためにはもっと講師がこの講座を計画的に運営して、段階を設けてステップアップすることや、あるいは課題を出す、予習をさせるなどさせることが必要だったのではないか。」という意見である。

どちらの意見も、こちらの授業の構成や内容のまずさから生じたものであり、十分頷けるところがあると同時に、この二つの意見の中には、“良き”議論に対する誤解が多かれ少なかれ含まれていると感じた。これらの意見の中には、議論の理想型やテクニックを“理解”し、実践に“応用”

する、あるいはテーマについての知識を積み重ねて、それで実際の対話をする、という見方が存在している。こうした考え方においては、対話や議論の場は技術を転用し、知識を披露するための二次的な場でしかなくなってしまう。

しかし、今年の授業で強く感じたのは、“良き”議論を営むのに不可欠なことは、対話や議論の技術でも、ましてやテーマについての高度な知識でもない、ということである。言葉を定義することや論拠付けを丁寧に行い、判断を吟味することの重要性をどれほど知識として知っていようと、一問一答式のクリティカルシンキングの教材をどれだけ解いてみようと、それらは実際の議論の場から抽出され、状況から切り離された知識でしかない。重要なことは実際の議論の中で、さまざまな意見に相対したときにどんな“態度”がとれるか、ということである。

判断を吟味し、論理的に考えることと、他人の意見をきちんと聞く、自分の意見が伝わるように丁寧に話すという態度は別々のものではなく、言葉の意味をきちんと決めたり、意見の理由を述べ、それを他人とともに検討していく吟味や論理的思考のプロセスは、他人とともに対話に向かう“態度”、対話における徳として、まさに必要とされているのだと思う。

その意味で今回の授業構成は、議論を実践するまえに、“良き”議論についての知識やテクニックに触れるというような形になってしまった面がある。“良き”議論を営むということは、他人に向かい、他人とともに話し合う時の“態度”の

問題であるということ、このことを十分伝えきれていないとするなら、この講座はあまりうまくいかなかった、と言うべきなのかもしれない。次回があるとするなら、基礎と応用、知識や技術と実践というふうに切り離さない形で、あるいは両者のフィードバックということを考えて、教材や授業の構成、議論への介入の仕方を工夫しなければならないと思った。

最後になりましたが、へっぽこコーチについてきてくれた受講者の皆さん、この講座の影の主演 洛星高校のクリス先生、講師として関わってくださった皆さんに感謝しつつ、この振り返りの文章を結びたいと思います。

